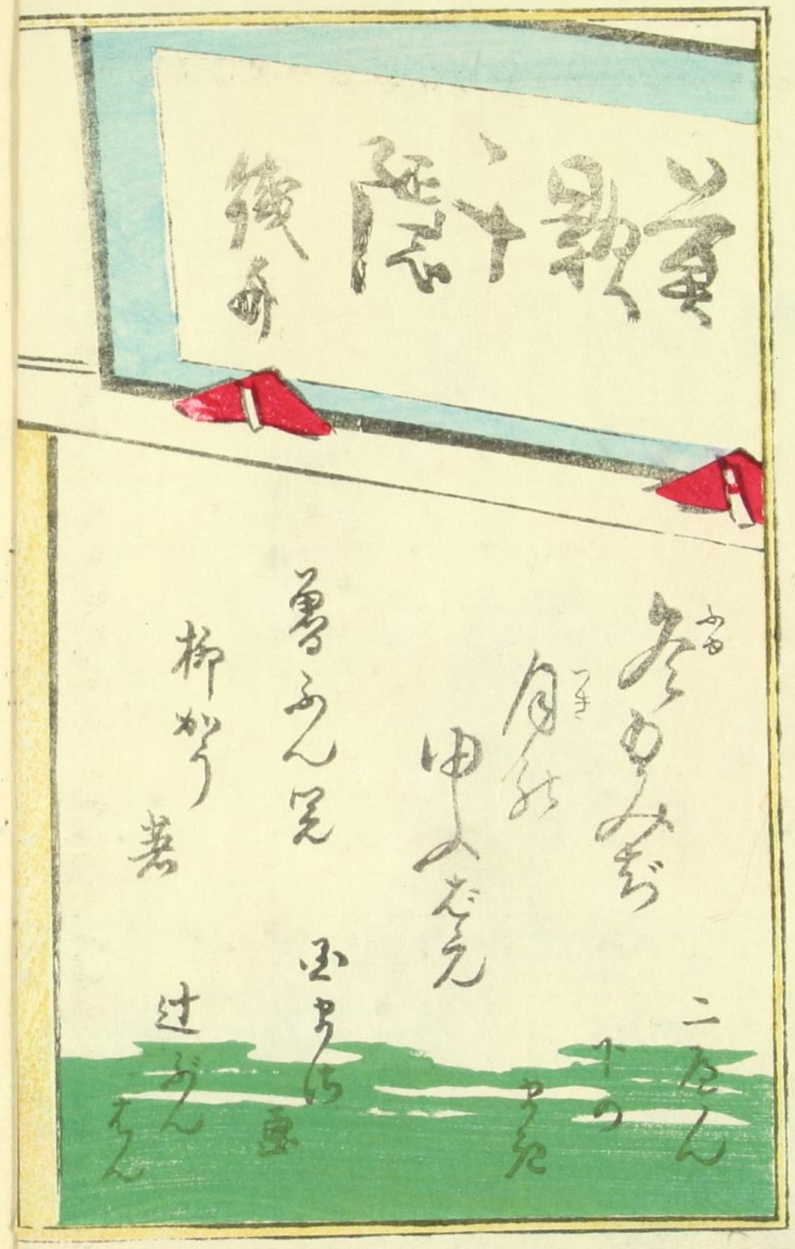
きんしょう
三下巻
市さん
梅坂國政画
中之巻
尼田彫長
十二月の仇寒
二十四孝錦絵
冬梅月久栄
貞二郎画
雑賀折秀著
上之巻
假名垣魯文閲

十三夜の月見
三十間堀桜紅
冬梅月久栄
貞二郎画
雜賀新秀著
假名垣魯文閲
上之巻

A522
4



<48-83217>

冬楓月夕榮第二編序

才子兒も知る日本の名物復讐の巨魁を問む先假名手本忠臣藏
の抑此狂言の權輿といッた頁い元禄十六年未二月十六日より堺町
勘三郎座に於ていろは評林と外題を揚げ曽我夜討に脚色に與
行せーと嵩矢とー其後大坂なていい宝永七寅年篠塚庄松座に於て吾
妻三八作條塚治郎左衛門大きー官佐野川萬菊大岸カ演劇ーグ當狂
言の第二次ぎり中古寛延元辰年竹田出雲並木千柳の両氏假名手本
忠臣藏と題大坂竹本座の操狂言に脚色ーるより大星の光耀末世に
輝き忠臣の名誉今ホ芳ー這回我友柳香子臼井六郎の敵討を例のオ
筆もて綴るとき序文に換るに忠臣藏狂言の事歴を以ても

明治十四年丑

孤蝶園主わか菜誌

早川勇
瀬戸直久

一の頼妻おいく
白井六郎

教員度初編の漏脱紙補ふお絵書様
編者杉香緯しんで看官諸君よりお絵書まどしまるいとの
敵対の題来るつのたい者彩文1いづれも紙載いいと
きしさなるまこどゆくその寡恨の判然とーさのわるく
喧伝ゆよ絵書とかんしのまよて確乎とーさ
語しいござりませぬ拙者もこの移を紀まを
あい原そど拙をいくし旦初編の序文1
賞嘗が紀まきさ通り一瀬本久氏い
ま細まつく拙者も愛く面識しる人のう
かくぐ原う渓堂を紀まきてないろく常り
関合まそうち金松堂ろいいきくと矢の煙俗
日蓮断の荒屋人子傷が吾拙つく急えるを山むことを沢を

ぶつけ書或やらぬと初編之冊書繪つく渡しと渡
後顛末の事実が判然初編の移と引合せよ御ろの漢文
あるよりおそ又渡迄さるも勘うれば今更踏渡も給方
なく移廻り届けと初編の出板そこで意情いごさるもの
るがこの処にて第編の漢閑と漏脱を補ふる出社渡
実おくれ絶の若縁その代りまい重毛も虚の文らぬ実
説四説新でなつさうまくだつさうと渡くまでのお伽話し
よ急度保証いさーまる長若縁へ本文の物得らよく
初編のお絶左閑

○参設吉田陰嚢とせーが当時へ朱吉田悟助と唱え慶
蕩の後陰嚢と呼ぶあり

○一説亜久い亜理と晴穀せーしへ山本勝美と称へる是

も発膚の汚一激と相後一分のぬく亜久と呼ぶ

○白升亜理が同港湾と多張せーこの日蕩中意衡平と
呼びー者とあ同港説と多張一白升と亜二の友たう
しが亜も白升晴穀の後千塚湾壮士紫の為自筆よ
て晴穀されう

○千塚湾の壮士へ白升中意と対する後新汗状と号け
両人が亜設と寄形号の係と繋げ蕩離よ捨げし
中京赤の意顛と京家福副蕩へお彩けとなり後悪
皆亜罷よ第主

○設亜理が舎弟工壮同仲亜理を未出平と一七宗家よ迫
るさ迄が形同仲へ数月獄よ繋うる発蕩亜郎の
除出獄免されて功主

○直理と晴敎せーしころハ一瀬えーろを純の者皆血氣の壯年まーして又隙器の風い免ゐ是ぞ然るを初編の雲い皆十八九をその系繼ょ畫きーい編者の主意ゑよ通ぜざるの儒者ひょ知ゐるゐみみ

○當時秋月藩の執政職ょる兼滴を敎い全く攘夷論をよこせーしろ陸ょ向井右田中意の素を始忘ーゞ維新の後朝廷驕ょ開港貿易を許さ是ーーより攘夷編の行ゐを是ざゐ紙幾ゐ開化意在ーて作幕家と云解せーゆ忘干城論ゐ論とする攘夷論の行ゐ是ざるよりーーより晴敎せーゞどその實い各自ゞ抱ゐ論を希ふ

右ハ初編の脫漏と補ふなる是べ看客その心組ゐく幾

冬枫月夕榮二編巻の上

假名垣魯文閲

彩霞園柳香著

薄桃色の心を同されて教らで中く愧ゐーゐゐと水府の義士武田耕雲齊が辭世のみく志操を決ーく國の為ふ是まとゐい業ゐゐもんを繁見て止む日本魂ひの丈丈雄ハ比喩賦名を負ひ奸賊と云ゐゐも浸世又是紙評まるの人よりて只當時の外見ょりゐべゐんやさ是べ維新更新の氣浸天涯と唱へ新奸と号ーー殺ゐくーて人を晴敎まるの風旺んよ行ゐ是世の人も又ゐ是を義と呼び忠と称へ説の可否いまだゐく逆陰ょ賛成まるものゐゐ心ゐる人を勸奬せーゞとの弊い内国靖藩

つゞき　壯士

肇の気くへ
慷慨の基

とるのーと
却説秋月
の藩中にて
千歳隊の
壯年八間
藩士井上理
左衛門平
弓戈晴毅ーー
斬奸状と認めく

▲後藤のものなり又い
宮崎車の助のごとくい
ずれも
義士

藩廳へ出せし後羅と
結と之ーうしうのとく
一已の意義よりなるふ
のうちに必意方向の遠ひ
より国を思ふ一心より斬る
拳動よりなびーなとべと
宗家の秋岡藩より系統
のその動人上伸して級
竟の海法よりつくろう
との時八世の中も自結
と英明進歩よりとべ
千歳隊の中ふも系地一

▲攘夷とう傾港
とう仏い且ざる説
と述べ之とう元の
同志中ふも
及動生る
者多ろし
う一瞬歩久い
疾くも国の
動静と貴彼ーとれも系年の
日本よりなうに疾く方向を指ドて

次へ

つゞき
業とおさまぬん
び絶死を過まると
なるべしと同隊の中
ゆくも豆二の友さる
戸糸葉よ玉緒とつゞ
福岡藩の閑雄さ
男

たゞし軍門第とそ
維新第後交際と
して頗よ藩主家の
徒ゆゑ同人い今柴
糸ふて
司法
裁判所の
判事ゑ出バ
彼よ便ゆく
直

つぎ

杉本検事ガ今
息ヒトツト嘆キテ、支離滅
裂ナ訪問ヒ杉本
若ヒモ世界ヲ語ル
検事ハモ一瀬ヲ涼ク

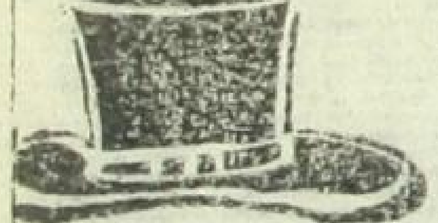
つきまとふ同人もつまごゝさへ
妻の相手にあらバ拙者が
擬いふを遂むとせん
と思ふが如何
なりんとの給ふ
しに早川氏も
いたく喜悦びこハ願ふても
なき事なりと其要久も満
足なしとこの都育を要久
へ相続しよ要久もその命志
を深く感じ不肖なる
拙者と梅が君の

夫一双の
美女を

○しての婦なんハ実
不案
縁なる
べし
人皆と
言を
終ひしが
後不幸の
別れなりしと
後なりぬ

令嬢とふいと
不似合の縁談
なきと貴人君が
学業に嫁ぐなく
和議なし家久
しく要らみるで
ござらしと頼み
の仲に早川氏へ
彼我の間に周旋
して遂に夫婦となり
ならば世の女ハ才色
とまふらびなく苑▲

▲嫁んと
として月の兼
小芳むしく
杯盤を進
て徳の方に
戦ぶ相く
要久ハ寄の男子
いく女ハ娟娟なる女
ありその其その縁大



連ね
しく子
佳人この
まさに
身の推
知るべき
団縁体願
要久ハ妻
く勉励
能の為
それ遂
非常
のちん
明治七
年の秋
録余に「つづく」

官許 朝鮮名法 牛肉丸

大包代二十五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭二厘五毛

官許 たんせきの薬 天恭丸

一包代六銭二厘五毛

書肆 日本橋区横山町三丁目二番地
地本錦繪問屋 金松堂 辻岡文助

010190513608

سیر دریای نیل

梅堂國政画
中之巻
尼田彫長

A522
5

冬楓月夕榮二編

上巻

仮名垣魯文閲
雑賀柳香著

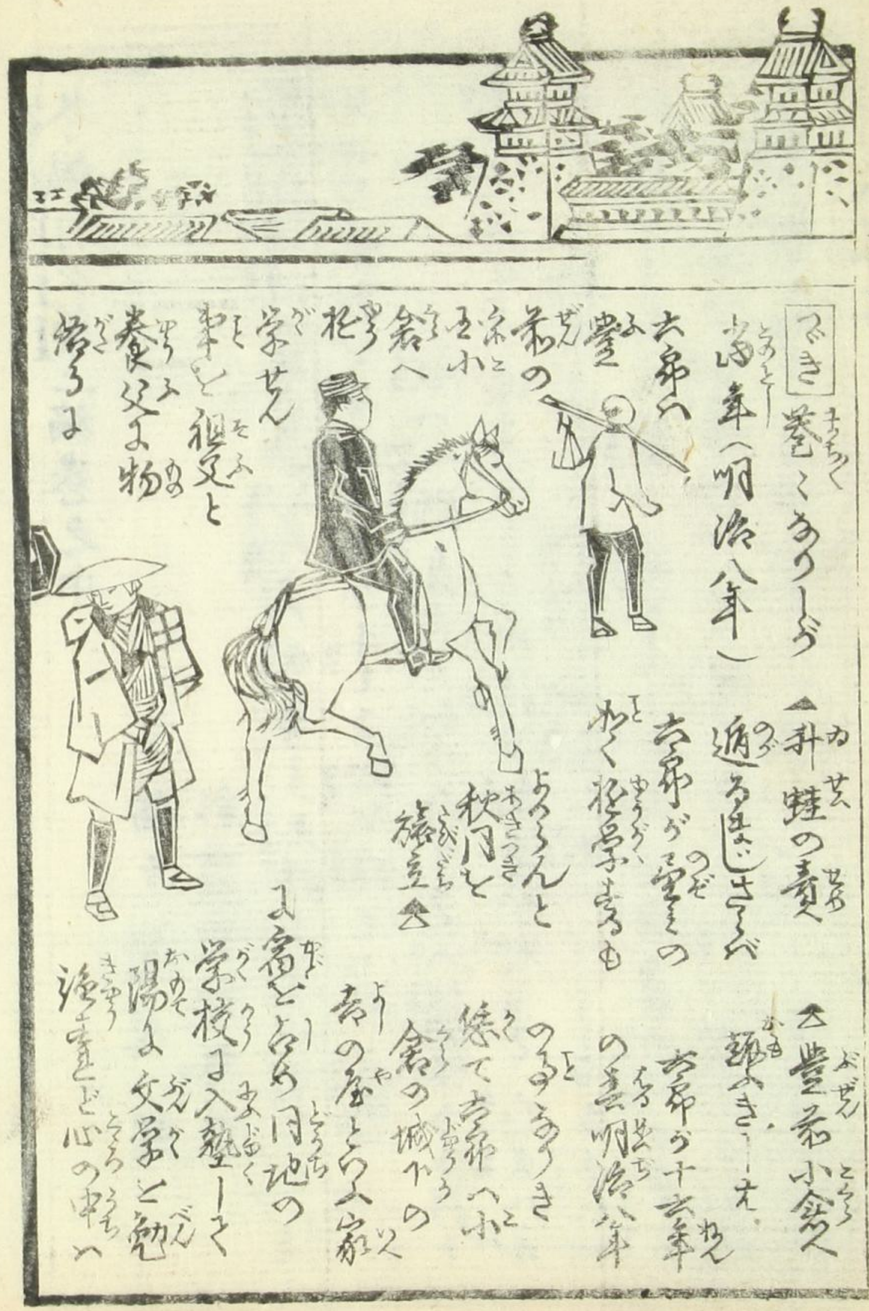
金松堂
秀梓

<48-8322>

冬楓月夕榮二編巻之中

猫々道人閲
彩霞園柳香著

弟和鷸復孤六郎は幼年より天性孝の道をなれば父母の最期を悲み手くるま心を碎くこと不国敵(一瀬直之と)の間法を犯さず却つて亡夫へ不養父祖父より迫まれとも孝ありと制せらるゝ今更よ主君と思へどよりもなれば時機をまちて業を果さんと武術を練りて一瀬が果京よ知らる後の動静如何ふと探り関くるに今は官途よ奉職し平穏よりとも言ひまさい憂新人行ーとも風説の


つゞき
豊くまつり
▲升蛙の責
▲豊岩小金人
▲秋月と
▲高とり月地の
六年（明治八年）
六年の豊
茅の
糸と
ほ
舎へ
花
学せん
と
養父よ物
学校へ入塾
陽よ文学と勉
強まと心の中へ
通ゐ医さてべ
六年が豊くの
ゆく花学まる
ようくんと
舎の城下の
高の屋とゐ人家
鶴ゆき一れ
六年が十六年
の豊明治八年
つのつき
続て六年へ

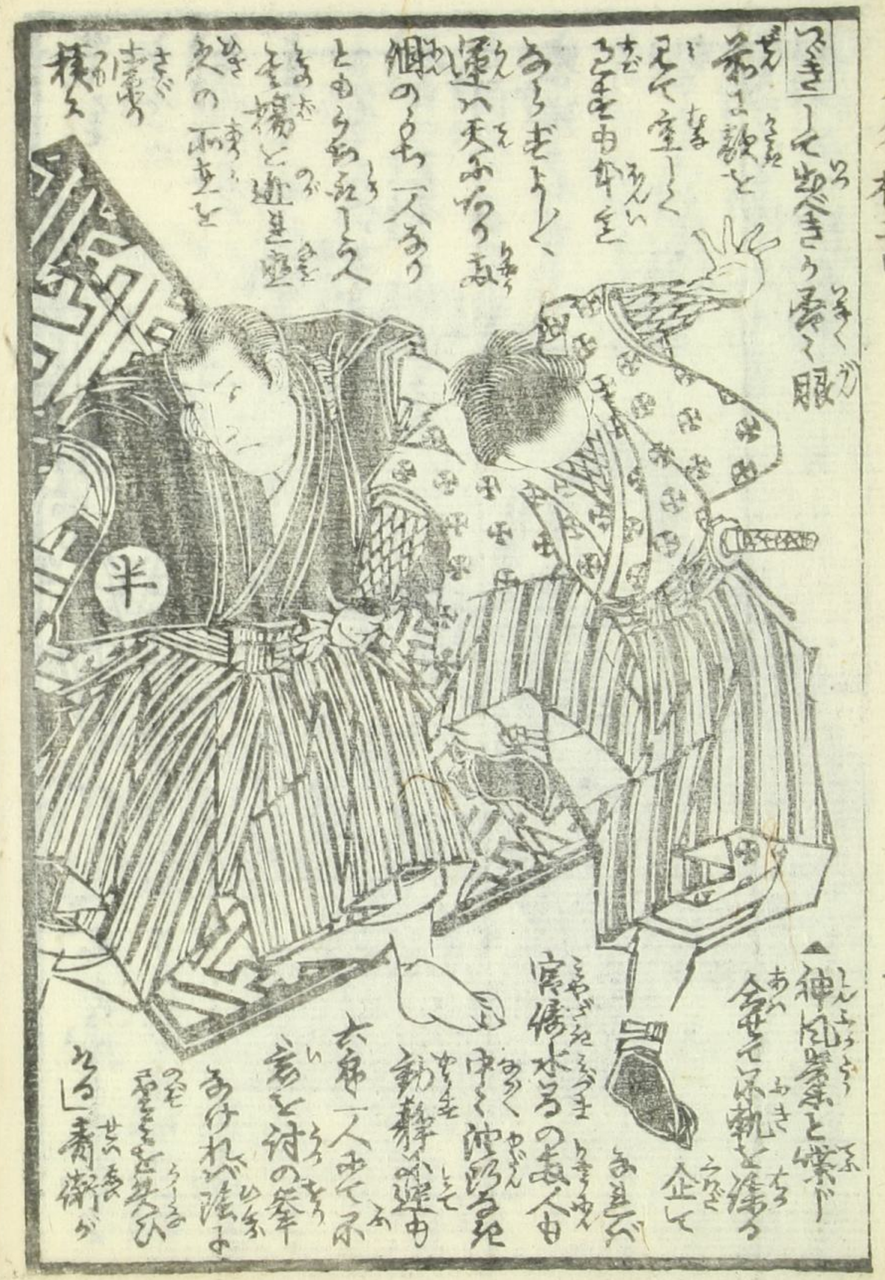
山
男
御泊宿
方今の
飛脚ふ若年者ゞ他ゑを
ゐるぬべ
月給
くるゝ五五とゐく一滴ゞ拳
動を振り振り
ふ疾くも高年の
九月とゐり
つゞく
来のるも意を
又ゞ飛敵
のと侯地よ
も案案ゐりの

つゞき
或日曜日
お市
清と
茶屋
して
牛肉
とせん
と軽
町辺の
牛肉
御主湯て
二人の書生
余程
町の動
静まて的
十八

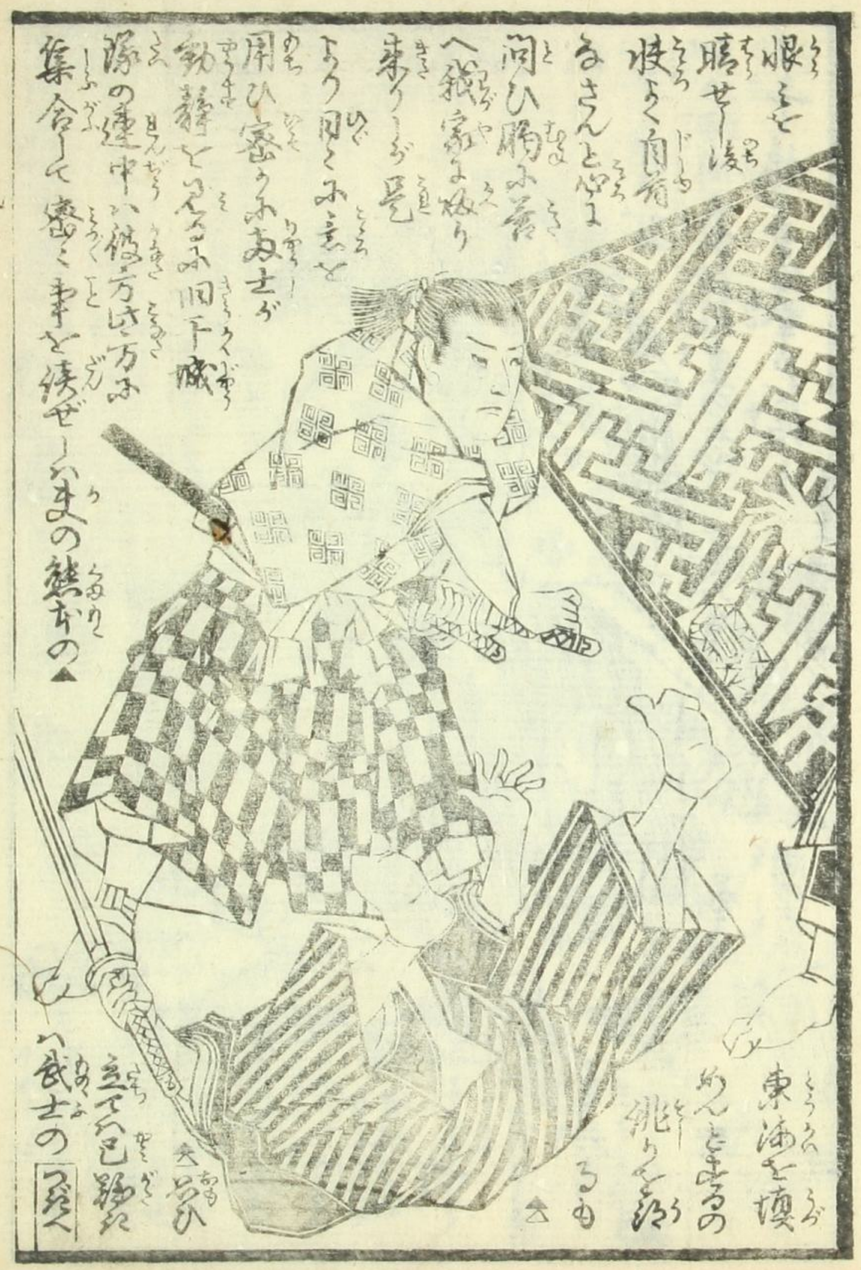
記
酒
お市に行位まて縋と
命じて牛肉と喫する
内ら〻後二人に茶の
姿をかるよう語り成
盛く小声よりりーぶ
早酒盛見て言葉へ
酒のいまるものあ
う干燥酒と一ト云ば
お市ゞ耳み入る

福岡士族穂波半太郎
秋月の士族を説諭せ
半
水

車



▲神風紫と號ず
金せてはの執を落る
企て
あるべ
實傷水るの長人由
ゆく沖の長
動靜の運由
六番一人ゆては
言を討の拳
あければ落よ
る青衛が



眼を
睛せ浸
收よく自者
るさんと
問ひ勝ふ者
へ我家よ炊り
来りこ見
ろう用こみ主と
用ひ密うみあ士が
動靜とさるふ四下藏
源の達中い彼方は方ふ
集合して密こ事と使ゼしいまの熊ずの▲

東海を壞
めんとまるの
能りを沼
る由
▲

三でいに已弱
▲武士の

つゞき
一きのうえんかの秋
月の士族みて四千機隊の
除隊みて
水戸のまく
とんぢめ月
志の高く
集会して
南門の
政事を
不事を抱き
本の領国士族神風意のめんく
よ手様て事を挙ると絵
東
第二級
岡の士族
第一級
性質
遇
後

連絡と通ずゝ
も結果ありて
数ひ種回少拾と
宮妻と刺一
数つの暴乱及びゝ
秋月出も月月暴の月
いまく暴発ありさんとする
粒逆判結あり
半

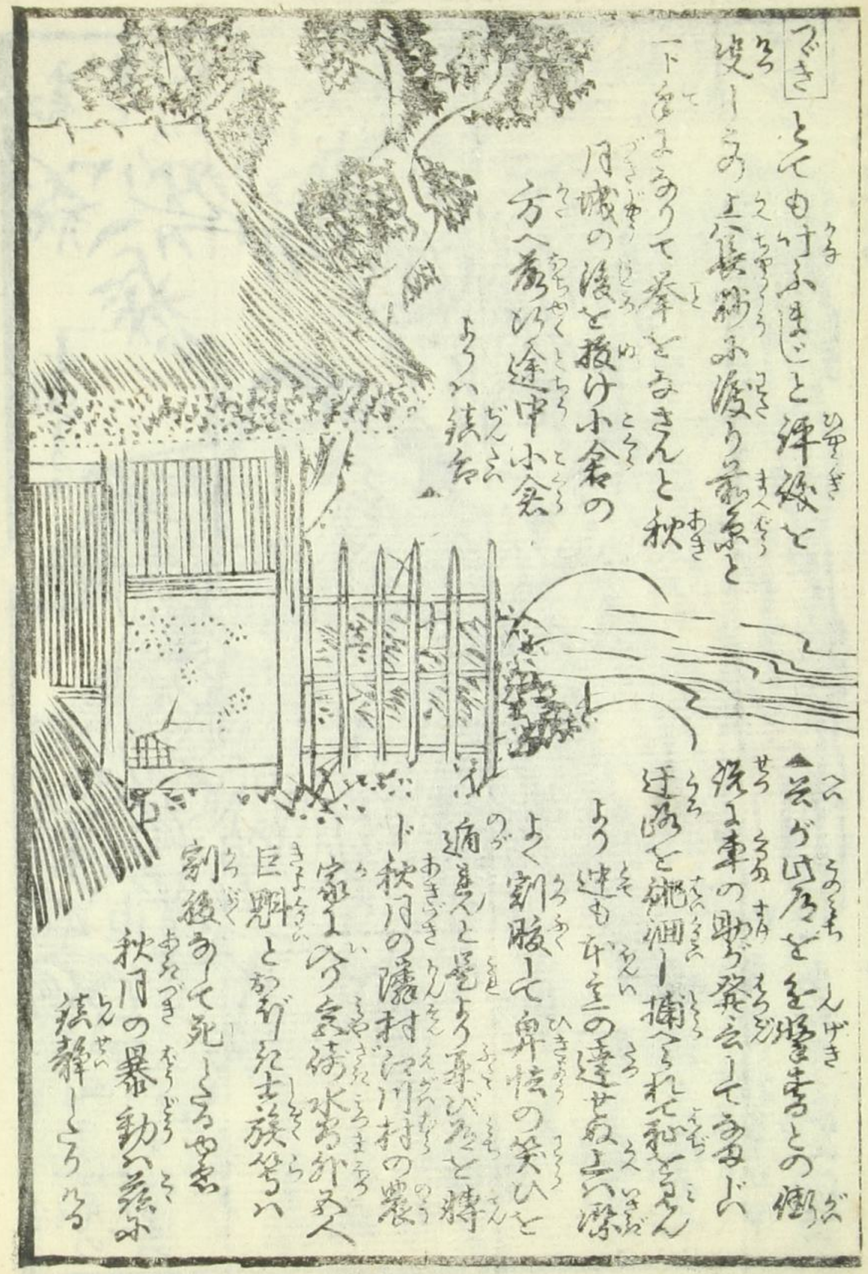
つぎ長
倩雨霧び
秋月の
動揺を
関くあり
緩開ふね
り鎧会ま
と綻き法
故の任と
帯るの
鬱鬱情愛
の葉を伸ん秋月の

△えーいで
軍陣の血祭りみまろ
穂波と斬べーと
後備△

△黄甲く面出して
逆ま天ぜんもの集まり掃
結ぶして撃よーう騒もぎえ
やる兵隊がみの下よ
消へるゴ穂波生年

つぎ　世八幡起き勇士と頼せしはまこと是非も
なく〳〵事多く〳〵関東軍奉命が車の駆うるよ
ざんさま〳〵まその活〳〵景面の紀とる五と
新報さまこ〳〵まその活〳〵景面の紀とる五と
を文よ事〳〵つぎれば書きて近国予が著き
九州名蔵徒この冊子に載べし）巻て
明治九年十月某日稜岡な呉の
徒名を八幡野石村まで
出張せしもとの所
秋月の
異徒
▲後後徒
名を石丸
石村より工番
地理に精しき士族の発奴
義と企て基を呉に撃て
一旦陣所も混雑高くれど
卒国紀藻の呉
攻撃を味器徒
奪ハ仮の人数を
高谷の呉の
今変ハ仮高
巨輪

ふ呉
を
を
徒
列
他
む紙
の
変
と
殺
巡
陽
国年
世も
▲
陽前の
士族連ハ
徒五く
小倉まれど
不和瀬
の
▲
▲
敵ぐふ逃失て
残るハ徒の人
角のを戦年力も
ふ敗ハ次へ



つぎ　とてもけふはまじと俳徒と
愛しみ上人長柄の渡り義経と
一下をよろうて拳をなさんと秋
月城の浪を渡り小倉の
方へ落ち途中小倉
ろうの張名

◆芋ゞ山屋を盛り書との御
洗ゝ車の助ゞ発会して寄よ
迷路を紙細ー摘へられて和とるん
ろう迷も平生の達せ敢ゝ際
よく割腹して鼻性の笑ひと
通ゞ人と是より寄びゝと特
ド秋月の藩村ゞ川村の農
家ゝ今会徒水あ新丸人
巨鰐とあり紀去族笑ハ
別後あって死しるゆき
秋月の暴動ゝ義ふ
ゝ騒しろる

官許　朝鮮名法　牛肉丸

大色代二十五銭
中色代十二銭五厘
小色代六銭三厘

官許　たんせきの米　天巻丸

一色代六銭三厘

此薬は男女ともに用ひ長く用ひ久しく
効一ゆめとそのゆゆしきを恐れ
ゝ特薬ゝ用ひてこんきとまるの長ゝ
ゝ病れば虚弱の人となる事疑はし
む無益ゝ薬なり此薬人の後ゝ

此天巻丸ゝ長ゝ効一たんせん丸。ぜん
きく。ひらく。ちゅう。ちゅう。ちゅう。ちゅう。きんせん
。ひゃうかん。きゅうかう。きんせん
きんどのせき。一更百日ぜんそく紙
一切のもたゝ用ひて効験速うあり
ゝ長ゝくゝ年積ゝ上ゝあるゝ

書肆　日本橋区横山町三丁目二番地
地本錦繪問屋　金松堂　辻岡文助

010190513616

三世相

きんしょう
三下巻
巻たん

A522
6

<48-8323>

冬楓月夕榮第二編巻の下

假名垣魯文閲
彩霞園柳香著

徒る程よ六弟いこの動揺の虚よ糸ゞ宮水を繋んと法け
祖へど敵い今回の巨魁なるべ命も多勢を引倶して逃避べくも
なりぬうち怨地この戦弟みうち遁是宮侍もゞ水間その他
山刺殺せーとの達ーゆゑ六弟い殘兵さ鳴呼浸是ら死ー
たり我が怨力をあらべーく自殺させーい亡魂のさぞ殘兵よ
恩まらん汗させぬ人父母霊とのよい一刺も疾く一撃を打
て接て修羅の妄執たらさせ中さん蓮の基よ因果物をといふく
業苧の念を決ー祖父養父よ業糸へ怪業のうゞと待へて止ま
れべ去程汝ら望をあらバ最早行てもうろうんと汗ーを交て

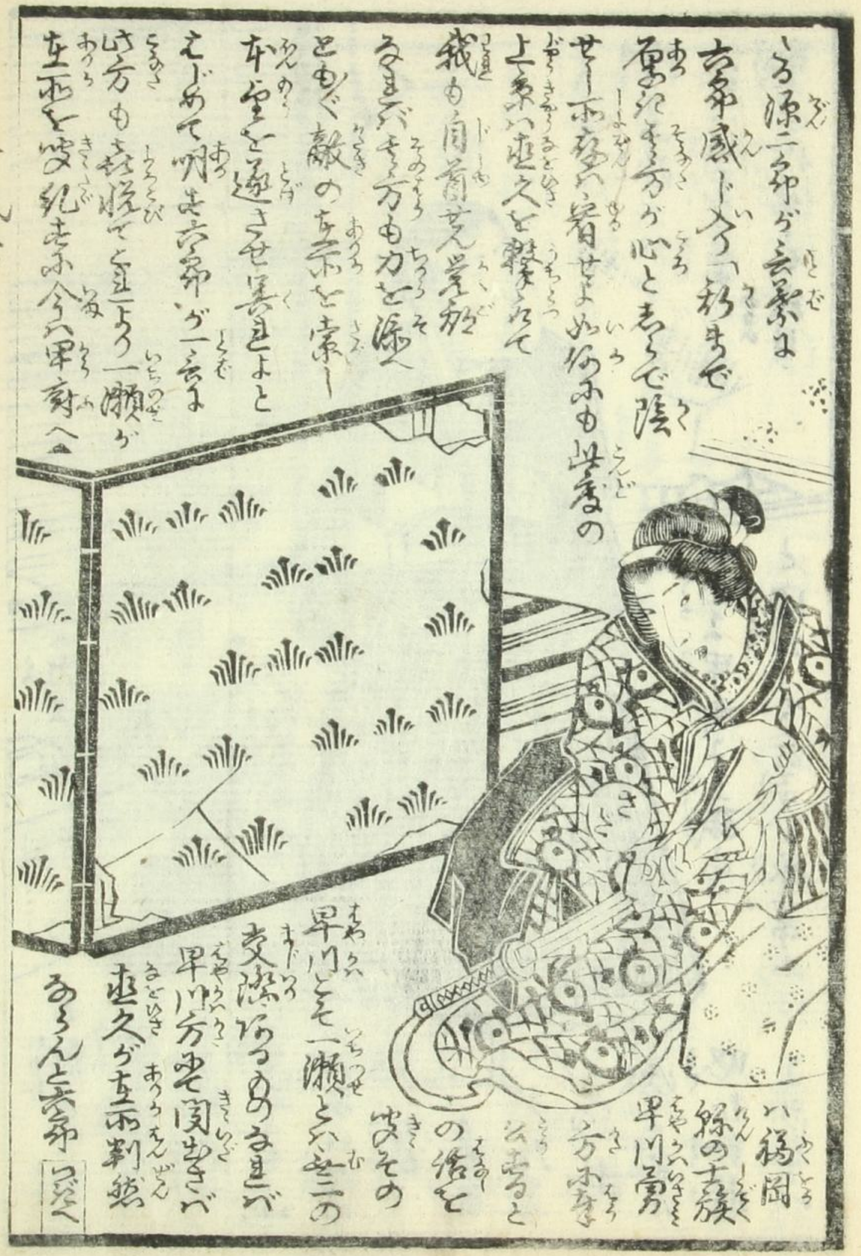
つぎ　六郎は平
迷旅装用意
ゑー若衆源義
源二郎と偽よ
遠見車頭位ー
秋月の影に沈め
とゆ　ろう心夢
まい雲る数知
の雲行の弓張
ある家を出て
浮世流世の前
途を見べ心よ

▲一八明治九年
八月廿二日のゆ
ゆうべ出発して
六郎主従は
神戸港で乗
車ホ第一
号に乗り新
を発御紀
ふ来ゑ久て
東京よ
第一い
九月二日

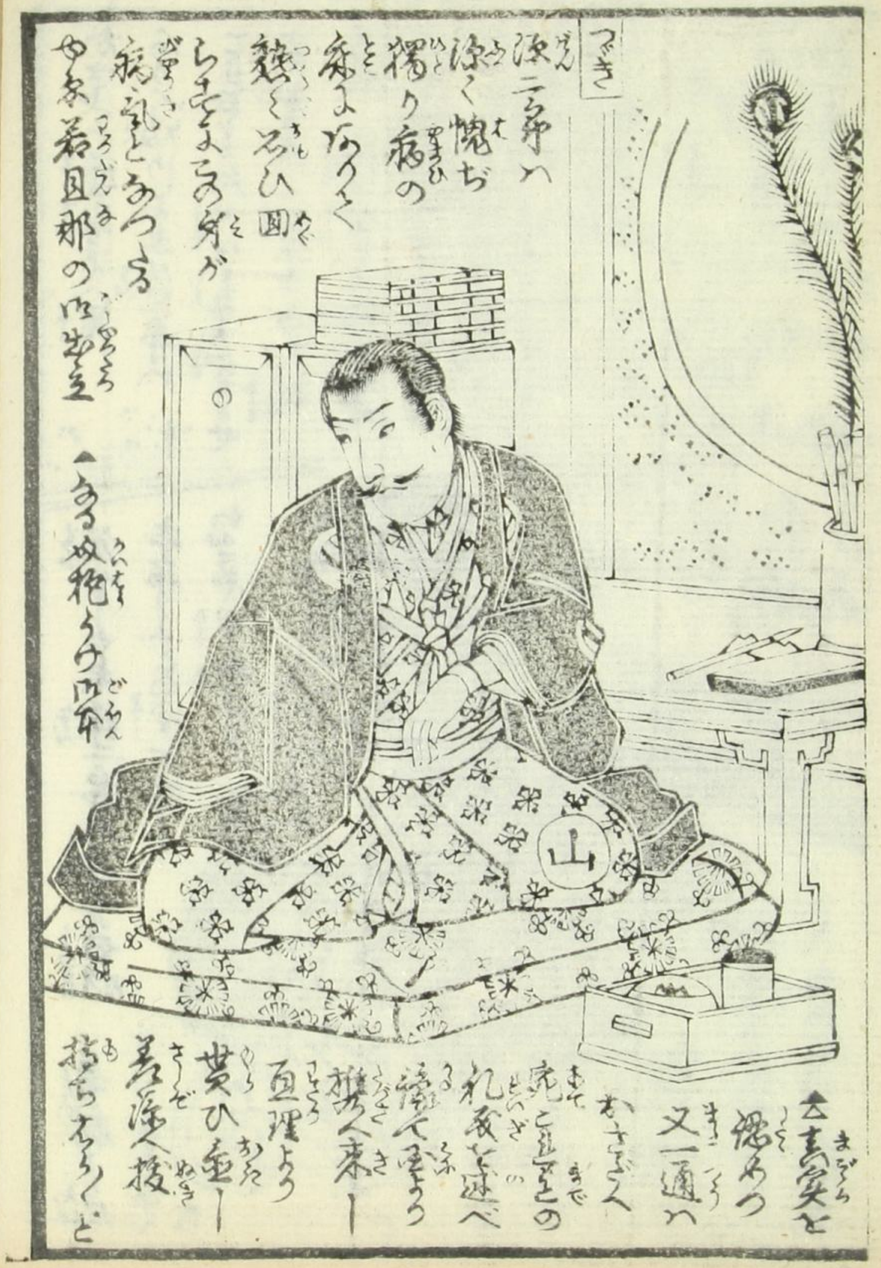
阿弥陀ヶ峯遠
けれ乃の緑永も
伝ろ厳えん鶴仙の
ことゝゝゑ激き石
梶や汁摺休うち
敷て宰府の宮
ゑ額づゝそ力を
遂さを絵へ見と
神の力を祈願の
関屋の里も涙ホ
ゝて博多ゆ出ち
神戸まで使紀とりあ▲

つき源
二郎が
ある
源

つぎ
六
源



つづき
六

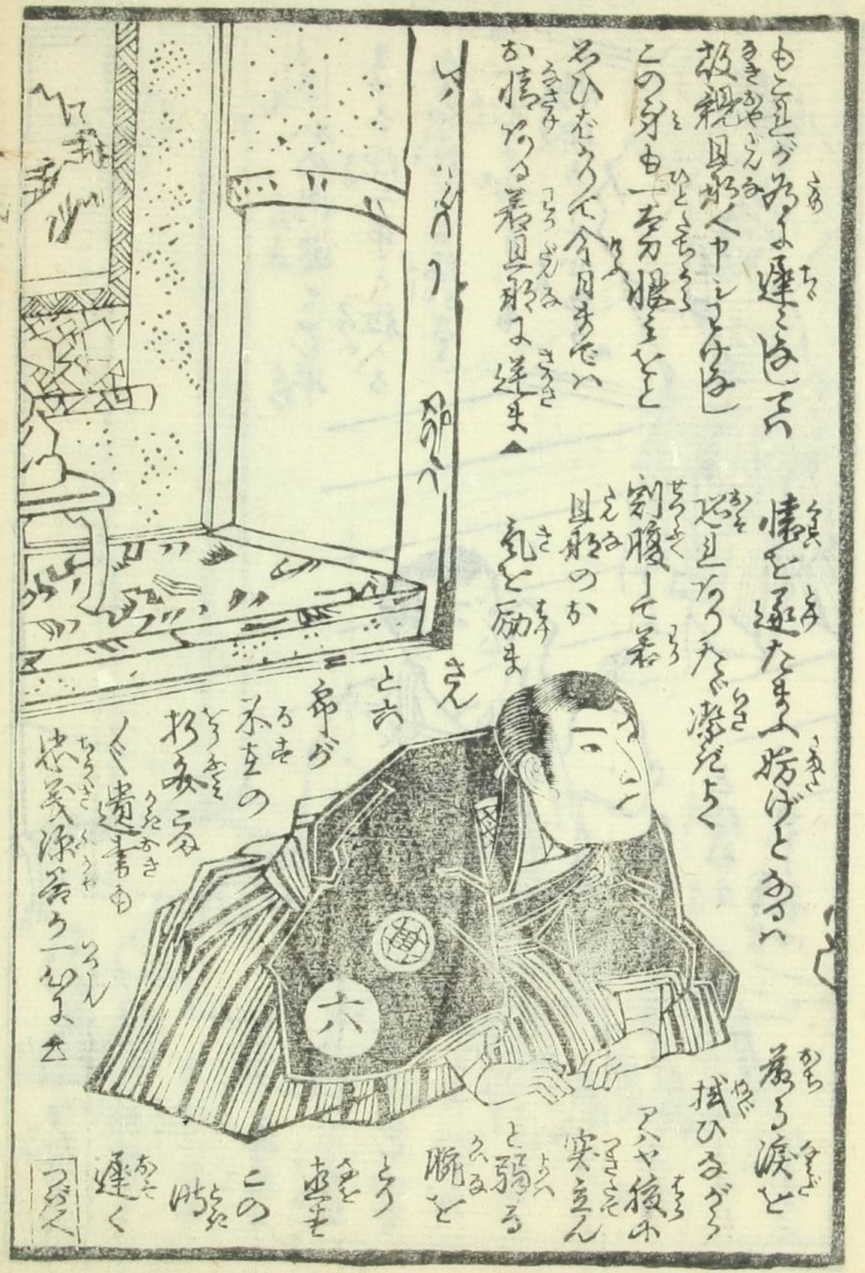


つゞき

涙二ツ弟ハ
涙く愧ぢ
獨り病の
癒よなりく
難く名ひ國
らをよこの身が
病乳とあつる
ゆゑ若旦那の口出を

▲ある故れみ四年

▲真実を
聞めつ
又一通ハ
おさゞく
完こと是の
礼義を述べ
嬉べまうう
様人来ー
面理よう
黄ひ亀ー
若旦人授
持ちたりゝど



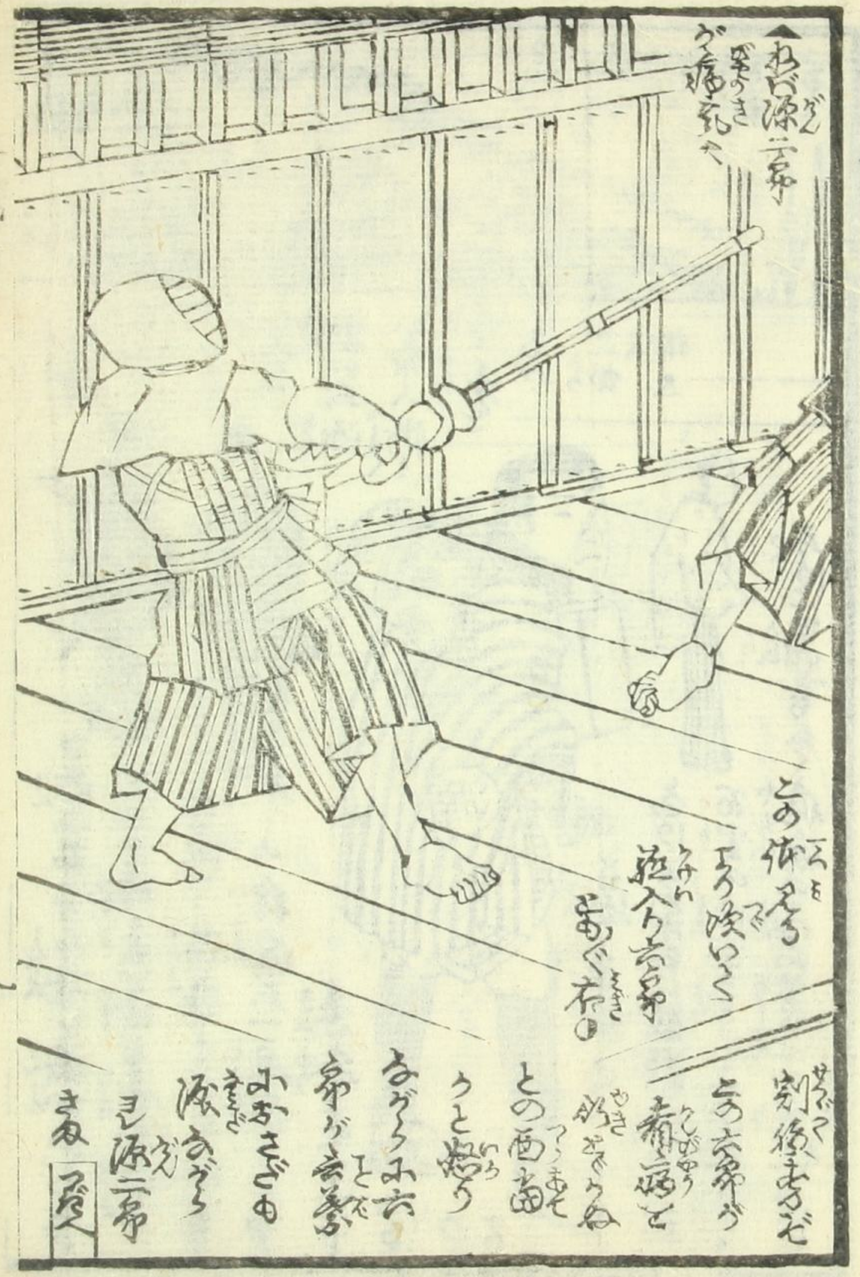
もこと是が為よ達こ色こ
故親旦那くヤレよみ色
この分も一方慢ことと
名ひたろて今月末でハ
お情ある若旦那よ逢ま▲

情と逸たまく防げとあるハ
迷旦たろ丸ぐ涙だよく
剣腹して若
旦那のか
気と励ま

えと
弟ガ
木主の
打ち
くく遺書
快愛涙ろ一ゆよ

涙ろ涙と
拭ひるがろ
アハヤ後ハ
実立ん
と弱る
腕と
ろを
主を
この
時
逢く

つぎ
かの門迷くアレ年
まるさ源二郎と組入る
お弟打ーも猛おさ
い兄よ者ども
勝負ぎーて心ろ
たゝコハ
浪人ろ
と源二郎が
真髪丸
きと六郎
いわだ
ちつて
「ハ
ふ侍
しら侍
六


ねぢ源二郎
この体
ろ浪いく
浪入ろ六郎
ぬぐ右
別後おだ
ろの六郎ぐ
看病を
との面面
うと怒ろ
なぐろみ六
郎ぐ六郎
おさども
源ぐろ
ヨ源二郎
六

源

六

假名垣魯文閲　雜賀柳香著　梅堂國政画

高橋門傳夜叉譚　八編大尾
夜嵐阿鬼奴花廼仇夢　五編大尾
氷錦隅田曙　三編大尾
國定忠次義名高嶋　五編大尾
腕競心廼三俣　三編大尾
綾重衣紋廼春秋　三編大尾
戀相場花王夜嵐　三編大尾
冬楓月はなの染　三編大尾

書肆
地本錦繪問屋
東京横山町三丁目二番地
金松堂　辻岡文助

010190513624

ابن خلدون